学生時代には「育私」を目指そう

谷岡　郁子
（中京女子大学長）

日本の若者って貧相だ

日本の街を歩く若者たちやテレビに映る若者たちを眺めていて、「なんて貧相なのだろう」と思ってしまうことがよくある。豊かな時代に育っていて身長だって嘗ての若者より高いのに、そして凝ったファッションを身に纏っているのに貧相だという印象がぬぐえない。情報機器を使いこなし、たくさんのことを知っているわりには自信なさげで存在感に欠ける。アジアの各地をはじめ、外国の街で見かける若者たちは、もっとずっとくっきりした印象がある。わが大学を見ても、入学式や年度始めの授業で存在感を放っている学生を見つけてチェックしたら、アジア人留学生だったということがよくある。日本人の若者全般は、言ってみれば幹や枝が細いのにやたらたくさんの葉をつけてその重みで垂れ下がっている木のようなものかもしれない。

教えるけれども育てない

日本の教育問題の根源はどこにあるのかと考えて、私が辿りついた結論は、「教えているけど育てていない」ということである。「教育」は教え、育てると書くのだが、教えることばかりに熱心で育てるということが放置されてきたように思われる。この二〇年間に掛け声勇ましい教育改革が何度も行われたが、何を教えるかということばかりに目が向けられて、どう育てるのかという問題に改善が見られなかった。いや、これについては後退しているようにも見える。教えることのできる教師はいても、育てるという観点と技量をもった教育者が不足しているのだ。日本の指導要領は教えるべきことの塊で、何をそこに盛り込むべきか抜くべきかで大議論を繰り返しているけれども、どのような力をどのように育てるかには無関心だったのである。研究者や業者がしのぎを削って開発した教育方法や教材、そして低年齢時代から繰り広げられる熱心な塾通いは、確かに多くの正確な知識を植えつけたのだろうが、その知識を支え生かすための人間としての力はむしろ萎縮してしまっているのだろう。その結果、鬱蒼と知識たる葉っぱが生い茂っているけど貧相な幹と枝でうなだれてしまった木のような日本人が育っている。そして木に力が無ければ、せっかく付けた葉っぱも枯れてしまい、落ちてしまうことが多いのだ。

人間力が求められている

私が「人間力」と呼ぶものがある。数年前、多様な分野の研究者を集めて「千年持続学」というテーマの研究がなされた。二〇世紀文明が作り出した高エネルギー・高消費・高廃棄の社会がこのまま続けば、気候変動や汚染、資源枯渇によって二二世紀には人類滅亡するという認識から、千年持続可能な文明と社会を模索するための方向性を模索しようということになったのだ。その第一歩の結論として見えたのは、第一に地球にはキャパシティがあって、それを超えた使用には耐えないということ、第二にエネルギー・資源は地下に求めるのではなく動植物という再生可能な生命資源に頼るべきであって、生態系の多様性・調和と循環を保全し、回復可能な範囲でこれを利用することに未来がかかっていること、第三にこれらの資源マネジメントを賢明に行うためには社会的、個人的両面においての「人間力」の開発が必要なことという三点であった。当初、物的資源マネジメントのみを議論していたのが、いくら科学的・技術的にこれが可能であったとしても、必要以上の欲望を抑えられない人間の現実を無視していては単なる机上の空論になってしまうという問題提議に議論が発展した結果、第三の点が浮かび上がった。千年持続する文明の必要条件として、第一、第二の条件を理解する理解力と当事者能力、それを社会のシステムに導入する科学・技術力と合意形成力、公正に資源を配分する政治と社会システム開発能力、物

質的豊かさに頼らない創造性、文化や活力が不可欠だということが明らかになったのである。これらの人間的要素を総合して人間力と呼ぶことを私が提案し、第一の地球のキャパシティ、第二の生命資源の可能性とともに第三の人間力の育成を千年持続のための三本柱として報告した。

人間力という言葉の説明が長くなったが、千年持続を考えるまでもなく、人間がよく生きていくために必要な人間力として体力、生活力、判断力、思考力、実行力、自己制御能力、共感能力、コミュニケーション能力、組織力など様々な力が不可欠である。これらの力の源泉として、知識は必要条件であるが十分条件ではない。そして教えることができる知識に対し、力は育てるしかないものなのだ。だから、育てることが重要なのだ。

福翁が主張したこと

福沢諭吉はその著作において、知識つまり人間の教育の前に、獣性つまり野性的・体力的人間の教育が必要だとする。自然・環境と自分の身体として付き合う力、挑戦する力や制御する力を確立する以前の知育は意味がないと主張するのである。十分な探究心と好奇心、その原動力となる体力と五感を発達させ、自らの求めるところを知り、自らのコントロールに対して基本をわきまえないと知識は身に付いたもの、人を生かすものにならないと。一万円札の肖像として選ぶほどの人物と認めながら、日本人は福沢の本業であった教育におけるこの原理に注意を払って来なかった。これこそ、福沢が一生をかけて得た原理であったのに。高等教育から出発した福沢があえて幼稚舎を創った根拠であったのに。私は、現在の日本の若者が貧相なのは、福沢の教えに反して知識を受け入れる人間としての基盤的力を育てぬままに、幼児時代から教えるばかりの教育を行った結果だと考えている。

大学生でも遅くない

本来的には、まず人間としての基本的な力を育ててから知識を教えるという福沢の主張が正しい。しかし、日本の現状では、それは国政レベルで考えることとしてひとまずおきたい。むしろ大学関係者がやれることとして、葉っぱとしての知識の供給にかまけるだけでなく、学生の体力、五感の発達に注目し、観察力や自己認識力を高め、思考力や自己開発能力を身につけさせることに力を注ぐべきだと思う。私自身この課題に十数年挑戦し続け、

中京女子大で少しは成果を上げてきたと考えている。つまり、大学生でも遅くない。ただ、幼児とは違う方法論が必要なのである。いくら未開拓の基本的分野があっても幼児扱いは自尊心を傷つけ、拒否される。むしろ漠然と自分に力が育っていないことを感じ自信をもてないでいるのだから、自尊心を傷つけるのは最悪である。私は一年生の「大学論＝学生論」の授業で学生時代の自己開発とチャレンジ精神の必要性を触発することに努めている。同時に「人間図鑑」の授業で多様なゲストを招き、人生を通じて試行錯誤しながらチャレンジし、自己を開発してきたプロセスを具体的に語らせ、参考にさせる。これらを導入として、学生会や大学祭、部活、ボランティア等の課外活動や実習を伴う一般教育などの機会創出と支援に努め、学生が様々な力を自ら育成していけるようにしている。教職員たちや同様の教育を受けてきた先輩たちからのたゆまぬ働きかけと激励を受けて、自信なく尻込みする新入生たちも少しずつ自己開発の必要性を認識し、チャレンジし始め、変化することを前向きに受けとめ始める。そして、少しずつ骨太になっていく。

学生時代には「育私」を目指そう

強調したいのは、大学生の年齢になれば、教師が学生を育てる育児にかまけるのではなく、学生が「私」たる自分自身を主体的に育てられる場と状況を創出することである。学生が「知る」ことと「できる」ことの違いに気付き、自らを育てるための「育私」への意志をもち、挑戦するための刺激と環境、支援を与えられることである。その具体的方法論が明確にリアリティと選択肢を伴って示されることである。結果が本人たちから見えることである。今のところ、中女で最も成功しているのはスポーツだと思う。アテネ・オリンピックの女子レスリングメダリストたち三人をはじめ、各分野の活躍がある。大事なことは、客観的な賞のランクではなく、夢をもってチャレンジし、「育私」の結果得た人間力に手ごたえをもてたことだと思う。成果を得るのに必要なものは体力や技術だけではなく、自己管理能力とそのための科学的知識、ストレス対応能力を含めての精神力、チームメートたちとの協調性など総合的な人間力の開発なのだから。それが今後の人生における挑戦への基盤になってくれる。レスリング部ひとつ育てるのに一五年かかったのだから「育私」の場づくりは教える環境づくりよりはるかにたいへんで根気がいる。しかし、高等教育にあっても、それこそが教育の醍醐味であると思う。